

細胞機能情報学

スタッフ（選考予定）

生命の躍動の源に迫る

我々が“生命の息吹”を感じるのは、その生命体が“動いている”ことを認知したときに他ならない。この“動き”の原動力はイオンチャネルによってもたらされる。すなわちイオンチャネルは生命の息吹の主座である。本講座は、このイオンチャネルを構造、機能、発生にはじまり、組織での分布や病態での役割まで、広く検討を加えている。この研究領域は全ての医学領域に貢献するものであり、広く研究者を募っている。

研究テーマ

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 イオンチャネルの構造機能連関 | 4 発生期心筋細胞のカルシウム動態の変化 |
| 2 発生期心筋細胞におけるミトコンドリア機能の解析 | 5 心拍動開始時でのカルシウムチャネルの役割 |
| 3 生理的機能でのイオンチャネルの役割 | 6 骨格筋の運動疲労の研究 |

研究内容の具体例

1 イオンチャネルの構造機能連関

発生期は各器官の形態や機能がダイナミックに変化し、これは遺伝子の発現や改変によって制御されると考えられる。イオンチャネルは蛋白質であり、その情報は遺伝子にコードされているので、発生期にはダイナミックな変化が観察されると期待されるが、その研究は少ない。我々は発生学的知見が集積し、なおかつ、イオンチャネルを豊富に持つ心筋に注目し、その発生学的変化とイオンチャネル遺伝子の変化の関連を解明している。現在、カリウムチャネルとカルシウムチャネルの変化に注目しており、構造の変化と機能分化の関連を解明しつつある。

2 疾病の原因としてのイオンチャネル機能異常

先天性疾患の一部はすでに、ある種のイオンチャネルをコードする遺伝子の変異が疾病の原因であることが解明されつつある。我々は現在、先天性致死性不整脈に関連する遺伝子がイオンチャネルをコードしていることから、この異常なイオンチャネルの機能を正常なものと比較検討している。また、遺伝的でない慢性期の病的環境下でのイオンチャネル機能の変化が、病態を如何に修飾しうるかについて、様々なモデル動物を用いて検討している。現在、糖尿病病態での心筋イオンチャネルの変化について検討している。

3 発生期心筋細胞のカルシウム動態やミトコンドリア機能の変化

心筋細胞の興奮収縮連関では、心拍動がスタートするメカニズムについて世界に先がけてカルシウム動態の観察に成功し、さらにこの時点でのカルシウムチャネルの重要性について解明しつつある。また、発生期のミトコンドリア呼吸機能役割を明らかにしつつある。

大学院での研究生活について

講座のテーマはイオンチャネルということであるが、イオンチャネルに関連すれば、具体的テーマは基本的に各研究者が独自に考え、研究を遂行するものと考えている。研究の基本的手技、思考法、論文講読法、論文作成技術はその都度、指導教官との対話の中でなされる。したがって、時間は基本的に拘束しないが、教室の抄読会、セミナーへの参加が最低の義務であり、年に1～2度の国内国外学会などでの発表、1～2年に1編程度の英文論文の執筆が目標になる。

大学院修了後の進路

大学院修了後、希望する者には海外留学先の斡旋を行う。また、修了後に臨床研修を希望する場合は、希望する研修先との間での交渉、斡旋を行う用意がある。もちろん、研究者の道を進む者が多くなることを一番希望しているし、そのための最大限の助力をする用意がある。

分子医化学

スタッフ 教授 高 橋 素 子 講師 長谷川 喜 弘 講師 藤 谷 直 樹

生命の本質から分子病態へ、ともに学ぼう。

タンパク質・糖質・脂質といった生体の構成分子の機能と相互作用が個体の生命活動を支えており、それらの異常が様々な病態を形成する。本講座では、タンパク質化学、分子生物学および細胞生物学の手法を用いて病態形成のメカニズムを探索している。特に、タンパク質や脂質など生体分子を分離精製し、物理化学的性質や機能制御メカニズムを解析することを特色としている。

臨床医も分子レベルの研究の経験が必須の時代となった。研究を通じて医療の発展に貢献する人材を育成する。

研究テーマ

- 1 糖鎖によるシグナル制御メカニズム
- 2 肺コレクチンの機能解析
- 3 糖鎖の定量的な構造解析と機能の解明
- 4 呼吸器疾患における肺破骨様細胞の機能解析

研究内容の具体例

- 1 糖鎖によるシグナル制御メカニズム
N型糖鎖によるシグナル制御、特に増殖因子受容体分子の機能制御メカニズムを明らかにする。標的タンパク質を大量精製することによって、物理化学的性質を検討することを目指している。
- 2 肺コレクチンの機能解析
肺サーファクタント蛋白質 A と D (SP-A、SP-D) は C 型レクチンのコレクチンサブグループに属し、下気道における生体防御機構において重要な役割を担っている。我々は SP-D が肺がん治療の標的分子である EGFR の糖鎖に結合し、下流シグナルを制御することを明らかにした。肺コレクチンが糖鎖を介して他の膜受容体の機能を制御している可能性もあり、精製タンパク質や細胞株を用いた解析で明らかにしていきたい。
- 3 糖鎖の定量的な構造解析と機能の解明
糖鎖構造は遺伝子による直接的な制御を受けず構造多様性が非常に広いため、遺伝子やタンパク質と異なり、定量的な構造解析方法は一般化されていない。特定の細胞やタンパク質を標的とした定量的な糖鎖構造の決定方法を確立し、糖鎖の機能の探索、さらには疾患特異的なバイオマーカーの開発と新規な治療戦略の提案を目指す。
- 4 呼吸器疾患における肺破骨様細胞の機能解析
一部の慢性炎症を伴う呼吸器疾患ではリンパ球をはじめとした炎症細胞や類上皮細胞などの集合体である肉芽腫を形成する。肉芽腫の形成や維持に関する機序は明らかではないが、破骨細胞に類似した機能を持つ多核巨細胞の存在がいくつかの疾患にて報告されている。多核巨細胞の形成されるメカニズムや呼吸器疾患における多核巨細胞の機能、肉芽腫性呼吸器疾患の分子機構を解明する。

大学院での研究生活について

教員がスーパーバイザーとして大学院生の指導に当たる。自分自身で実験の計画と実行ができるようになるまで、特に最初の1年間は実験とその結果に対する討論をほとんど毎日行う。研究成果を週に1回のミーティングで報告し、教授や他の教官と共に方針を検討する。大学院生の自主性を尊重し、各自のスケジュールに合わせた研究が可能である。

大学院修了後の進路

大学院修了後の進路は様々であるが、留学を希望する者に対しては留学先を紹介している。

応用分子生物学

スタッフ 教授 鈴木 拓 講師 甲斐 正 広 講師 新沼 猛

エピジェネティクスから見た疾患メカニズムの解明を目指す

細胞は同じ遺伝情報を持ちながら、発生や分化、癌などの疾患において異なる遺伝子を発現するようプログラムされている。我々の研究室は、このようなエピジェネティックな遺伝子制御機構に關与する DNA メチル化、ヒストン修飾異常の疾患発生における役割の解明や診断・治療への応用を目指して研究を進めている。

研究テーマ

1. 疾患におけるエピジェネティックな異常に関する研究
2. 癌のエピゲノム異常の解析と診断・治療への応用
3. 発癌分子メカニズムの解析と応用に関する研究
4. 疾患における機能性 RNA に関する研究

研究内容の具体例

1. 疾患における DNA メチル化およびヒストン修飾異常の解析
2. エピゲノム異常を指標とした新規がん関連遺伝子の同定と解析
3. エピゲノム異常を応用した癌診断法の開発
4. エピゲノム異常を標的とした癌治療法の開発
5. 癌微小環境に関わる分子の同定と機能解析
6. 疾患に関連する機能性 RNA の同定と機能解析

大学院での研究生活について

指導教員と十分にディスカッションを行ってテーマを決め、スタッフの指導の下、研究を進めていきます。仮説を立てて実験計画を組み立て、その結果を考察することで研究を進めていきます。またその研究結果が、どのように患者さんの役に立つのかについて考察します。ラボミーティングでは自ら発表し、プレゼンテーションの経験を積んで頂きます。また、国内外の学会発表を通して見聞を広めて欲しいと思います。研究成果は英語論文として学術誌に発表します。

大学院修了後の進路

研究をさらに続けたいと希望される場合は、国内外の留学先を紹介します。臨床へ進まれる方には、臨床講座との協力により進路の相談に応じます。

臨床病態学

スタッフ 教授 高 橋 聡

研究方針

臨床病態学の研究は感染症、輸血、悪性腫瘍診断、超音波検査など多岐に渡る。これらの研究を行うにあたり、技術指導と研究機器が揃っており、遺憾なく研究マインドを満たすことができる。

研究テーマ

1. 尿のにおいの分析
2. 感染症の迅速診断法の開発
3. 生体内微量物質検出法の開発
4. 脂質推定値計算式の開発
5. 質量分析機器の臨床検査への応用
6. 糖と細菌増殖の分析
7. 難培養性微生物の培養法の開発

研究内容の具体例

1. 質量分析機器を活用した研究により、機器取扱の習熟も図り、臨床応用を可能とする
2. 様々な因子に影響されない臨床検査推定値を確立する
3. 細菌検査部門の技術力を駆使して研究を進める

大学院での研究生活について

やる気次第である

大学院修了後の進路

様々な進路が開けると考えている

免疫制御医学

スタッフ 教授 一 宮 慎 吾 講師 亀 倉 隆 太 助教 池 上 一 平

研究方針

免疫学は「生体が疫から免れるメカニズム」を知る学問として発達してきた。現在では「疫」の概念は拡大し「個体保全に必要なセキュリティシステム」が免疫系の役割とされ、数多くの疾患病態の背景に免疫異常が関与している。これまでに動物モデルを用い多くの知見がもたらされた一方で、残念ながらヒト免疫系については未だ不明な点が多く残されている。この問題を解決するため、我々は血液や扁桃などの臨床材料の免疫細胞組織を直接的に研究している。正常リンパ球の分化発達とその機能発現の総合的理解が免疫病態解明の糸口となり、免疫アレルギー疾患を含めた難治性疾患群の病態病理の解明や臨床応用に結びつくことを願う。フレッシュでバイタルな若いひとたちが、ヒト免疫病態のダイナミックな研究に参加することを心待ちにしている。

研究テーマ

- 1 T細胞の分化、機能調節のメカニズム
- 2 抗原特異的な抗体産生のメカニズム
- 3 免疫関連疾患におけるエピイムノームの研究
- 4 免疫関連疾患の病態形成に関わるリンパ球サブセットの研究

研究内容の具体例

- 1 濾胞ヘルパーT細胞において高発現している各種の遺伝子、特に転写制御因子 Bob1 に着目し、濾胞ヘルパーT細胞の分化および機能調節メカニズムについて検討している。
- 2 T細胞に関連する各種メディエーター、転写調節因子の解析を通じ、濾胞ヘルパーT細胞が介在する抗体産生プログラムについて研究を進めている。
- 3 エピイムノーム（上皮細胞と免疫細胞とのクロストーク）に関連する TSLP や IL-25、IL-33、IL-36 といった上皮産生サイトカインの免疫細胞に対する作用等を研究している。
- 4 気管支喘息、アレルギー性鼻炎、IgG4 関連疾患といった免疫関連疾患の臨床検体を使って機能性リンパ球サブセットの解析を行い、疾患による違いを明らかにし、病態解明を目指している。

大学院での研究生活について

充実した研究生活を送るためには、（１）自由な発想と情熱をもって、（２）確かな知識と技術でチャレンジし、（３）感動（ときには大いなる落胆も？）を共に分かち合う、ことが重要と考えている。自ら疑問に思った内容を明らかにするための環境づくりを常に心がけており、臨床材料の研究や、またゲノム編集マウスを用いた研究を通じて、疾患病態の解明や臨床への応用を目指してほしい。

大学院修了後の進路

免疫制御医学ではこれまで 10 名の大学院修了生を輩出し、現在は 5 名の大学院生が研究を行っている。フロンティア医学研究所での経験を活かして、大学院修了後も豊かな発想で医学研究を継続してもらえたら望外の喜びである。海外留学の実現にも積極的に協力したい。

分子細胞機能学

スタッフ 教授 白 土 明 子 准教授 有 木 茂

研究概要

自然免疫は進化的に保存された生体恒常性維持機構であり，外来微生物の排除や制圧や，変性自己細胞の処理にとどまらず，獲得免疫応答の誘導や調節を通じて，個体の健康を制御している。自然免疫反応には，液性応答と細胞性応答の両者が存在し，それぞれを構成する分子や細胞の構造と機能を対象として研究を行なっている。また，宿主内に細菌が存在すると，それぞれが他方を感じて生理状態を変化させている。宿主感知による細菌の遺伝子発現制御に着目して，感染症を規定する新規分子の構造と機能を対象とした研究を行なっている。

研究テーマ

- 1 宿主—細菌の相互応答と感染調節
 - 1) 宿主感知時の細菌遺伝子発現制御と感染調節
 - 2) 細菌毒性を規定する環境中因子の構造と機能
- 2 自然免疫による生体恒常性維持の調節
 - 1) 食細胞による微生物および変性自己細胞の処理
 - 2) 生体防御タンパク質の構造と機能，および臨床応用

研究内容の具体例

- 1 宿主体液成分による細菌受容体経路の活性化と毒性調節因子の探索
- 2 宿主と細菌の共存に働く細菌遺伝子の発現調節
- 3 環境因子や医療材料による細菌生理の変化と感染症の病態
- 4 肺コレクチンによる生体防御機能と呼吸器感染症の予防法・治療法
- 5 抗菌ペプチドの発現と機能の制御と感染症の調節
- 6 食細胞による細菌およびウイルス感染細胞の認識機構と微生物の免疫回避

大学院での研究生活について

教員が直接に大学院生の指導を行い，生命科学研究の基本技術を習得した上で個別のプロジェクトを担当する。また，実験科学者に必要とされる，論理的な物事の考え方，研究倫理を含めた実験記録，実験計画の立案と実施，結果解釈と考察，発表技術を学ぶ。学生には主体的に研究を進めることを期待しており，研究時間帯や期間についても相談に応じる。

大学院修了後の進路

希望者には国内外の留学先を紹介し，学内外の基礎科学・臨床系研究室との連携を通じてキャリア形成を支援する。医学部卒以外の修了者について，研究職やアカデミックへの進路を目指す者へも個別に支援を行う。